

## 江戸時代における武家地の敷地数の変動 その1 \* 福井城下の武家地の研究 その29

伊豆蔵 庫喜<sup>\*1</sup>, 吉田 純一<sup>\*2</sup>

### The Change of the site number of the Samurai's Premises in Edo era, Part 1 A Study on the Samurai's Premises of the Fukui Castle Town, Part 29

Kouki IZUKURA <sup>\*1</sup> and Junichi YOSHIDA <sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> FUT Fukui Castle and Castle Town Research Laboratory

This paper considers of the change of the site number of the Samurai's premises in Edo era. The change of the site number of the Samurai's premises greatly influence on the trend of the Fukui clan. In nine wards of intense divisions, there was the change of the site number and was concentrated on the east side of Fukui castle town. There are 23 wards of divisions with a few changes of the site number and is distribution the west side and the north side of *Honmaru*. As for ten wards of the middle, the number of changes dispersion in Fukui castle town. As seen in *Shinyashiki-area* and *Jyonohashi-area*, *Amakusa-machi* and *Eiheiji-machi*, the division that the change of the site number had intense and few division were adjacent.

**Key Words** : 福井城下, 武家地, 敷地数, 変動, 区画, 分布

#### 1. はじめに

本研究はこれまでに『松平文庫』所蔵の8図の城下絵図<sup>(1)</sup>を用いて、江戸初期から幕末までの8期における福井城下の武家地の屋敷割の様相や居住者の変遷を解明してきた<sup>(2)</sup>。その結果、武家地の屋敷割に関しては、万治2年(1659)と寛文9年(1669)の2度の大火後<sup>(3)</sup>、貞享3年(1686)の大法<sup>(4)</sup>以降、享保6年(1721)の松岡藩併合<sup>(5)</sup>を期に大きな変化がみられること、特に城下東南部の城ノ橋地区および橋南の毛矢町の武家屋敷に変化が大きかったこと、通りの付け替えと屋敷割が変わったことなどが認められる。一方、屋敷替えに関しては、江戸時代を通して城下全域で頻繁にみられ、特に寛永元年(1624)の忠昌の入部<sup>(6)</sup>直後と貞享3年の大法、享保6年以降の松岡藩士の移入期<sup>(7)</sup>に大規模な屋敷替えが行われたことを明らかにした。

本稿はこれまでの成果を踏まえて、福井城下における武家地の敷地数の変動を町別・区域別に比較・検討し、敷地数の変動が大きい区画と小さい区画を町や区域ごとに示して、それらの分布状況について考察する。

#### 2. 8期における敷地数の変動

慶長18年(1613)、万治2年の大火前、寛文9年の大火前、貞享2年(1685)、正徳4年(1714)、安永4年(1775)、文化8年(1811)、慶応年間(1865~67)の8期における武家屋敷地の件数を表1に示し、表2は42区の町や区域ごとの敷地数を示している。町名や区域名は、城下絵図に記載されているものを使用し、通りに面する両側を町としている。但し、新屋敷と城ノ橋は、通りと通りに囲まれた区画を一つの町として定め<sup>(8)</sup>、新屋敷は①区~⑥区の6区に、城ノ橋は②区~⑥区の5区に分けた<sup>(9)</sup>。

\* 原稿受付 2015年2月26日

<sup>\*1</sup> FUT 福井城郭研究所

<sup>\*2</sup> 建築生活環境学科

E-mail: kouki-i@fukui-ut.ac.jp

表1 江戸時代における敷地数の推移

年代 敷地数	慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
合計	723	627	628	707	537	731	802	774

単位：筆

表2 8期における町ごとの敷地数

区画	番号	年代 町名	慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
A	1	新屋敷④	30	9	10	29	6	12	12	12
	2	毛矢町	48	36	37	39	3	65	73	73
	3	新屋敷⑥	34	21	22	32	1	38	42	43
	4	新屋敷⑤	19	10	10	14	1	15	16	15
	5	新屋敷③	22	17	17	21	2	6	21	19
	6	鷹匠町	5	26	28	41	39	40	38	39
	7	新屋敷①	30	32	31	41	7	43	44	44
	8	新屋敷②	35	29	30	30	8	38	41	41
	9	天草町	33	25	25	26	43	32	33	34
		計	256	205	210	273	110	289	320	320
B	1	餌刺町	11	17	17	31	25	27	32	29
	2	南外郭	18	9	10	12	12	12	13	13
	3	御泉水町	13	11	11	12	6	8	9	9
	4	下江戸町	9	9	10	10	17	17	18	18
	5	鵜匠町		6	7	11	11	11	12	10
	6	城ノ橋⑤	12	13	13	21	21	22	24	23
	7	中江戸町	18	21	21	28	29	30	33	32
	8	城ノ橋③	18	11	11	11	11	11	14	13
	9	中ノ馬場	43	42	43	34	35	35	40	35
	10	城ノ橋⑥	49	41	40	36	37	40	40	42
		計	191	180	183	206	204	213	235	224
C	1	大名町	27	24	22	20	19	19	19	20
	2	神明前	16	13	13	12	12	12	12	12
	3	天王町	17	13	14	13	14	14	15	15
	4	元御泉水町	13	15	13	14	14	14	17	17
	5	観音町	20	17	17	16	16	17	17	17
	6	土居ノ内	31	25	25	27	26	26	28	28
	7	城ノ橋④	26	23	23	23	21	21	23	23
	8	上江戸町	30	27	28	27	27	27	28	27
	9	永平寺町	20	18	18	18	18	18	18	19
	10	東三ノ丸	12	10	11	10	10	10	10	1
	11	城ノ橋②	13	12	12	12	12	12	12	12
	12	西外郭	0	1	0	0	0	0	0	0
	13	三ノ丸鷹冷場	1	1	1	1	0	0	8	
	14	北二ノ丸	1	0	1	0	0	0	0	0
	15	西三ノ丸	6	2	2	1	1	1	1	0
	16	新築地	6	7	2	2	2	2	2	2
	17	竹ノ鼻	4	4	4	4	1	6	8	8
	18	北三ノ丸	6	6	5	4	3	3	1	1
	19	南三ノ丸	1	1	1	1	1	1	1	1
	20	木蔵町	3	3	3	3	7	6	6	6
	21	元割場	7	5	5	5	5	6	6	6
	22	御使番町	7	7	7	7	6	6	7	7
	23	八軒町	9	8	8	8	8	8	8	8
		計	276	242	235	228	223	229	247	230
合計			723	627	628	707	537	731	802	774

単位：筆

## 2.1. 敷地数の推移について

表1によると、慶長18年以前の敷地数は723筆で、万治2年にかけて敷地数は627筆に減少している。この時期の福井藩の石高は、藩政当初から68万石あったが、3代忠昌入封の寛永元年に大野藩（5万石）や勝山藩（5万石）など支藩の成立に伴い50万石に減り<sup>(10)</sup>、さらに4代光通時代の正保2年（1645）には松岡藩（5万石）と吉江藩（2万5千石）の分知により45万石に減っている<sup>(11)</sup>。

敷地数は、寛文9年の大火後から貞享2年の間に707筆に増えている。この期間は、延宝2年（1674）に吉江藩主の昌親が福井藩5代藩主となったことで、吉江藩の石高2万石が加増されて47万石になっている<sup>(12)</sup>。

その後の敷地数は、正徳4年までに537筆にまで激減している。これは貞享3年の大法（25万石に減封）に伴う武士の削減で多くの武家屋敷が空き地や地方地に替わっていることに起因する。

敷地数は、享保6年以降の松岡藩併合（30万石に加増）に伴う松岡藩士の移住によって安永4年に731筆に増え、文化8年には802筆と徐々に増加し、幕末の慶応には774筆になっている。したがって、武家地における敷地数の変動は、藩の動向に大きく左右されることが認められる。

## 2.2. 町ごとの変動について

図1は、42区の敷地数（表2参照）の変動を、町や区域ごとに示したものである。図1をもとに、42区を敷地数の変動が大きい区画（A）、変動が小さい区画（C）、区画Aと区画Cの中間的な変動を示す区画（B）に3区分する。

区画Aは、毛矢町、新屋敷①区、新屋敷②区、新屋敷③区、新屋敷④区、新屋敷⑤区、新屋敷⑥区、鷹匠町、天草町の9区である。

区画Bは、城ノ橋⑥区、中ノ馬場、中江戸町、餌刺町、城ノ橋⑤区、下江戸町、城ノ橋③区、南外郭<sup>(13)</sup>、鵜匠町、御泉水町の10区である。

区画Cは、土居ノ内<sup>(14)</sup>、上江戸町、城ノ橋④区、大名町、元御泉水町、永平寺町、観音町、天王町、城ノ橋②区、東三ノ丸、神明前、八軒町、御使番町、元割場、三ノ丸鷹冷場、竹ノ鼻、新築地、木蔵町、西外郭、南三ノ丸、北三ノ丸、西三ノ丸、北二ノ丸の23区である。

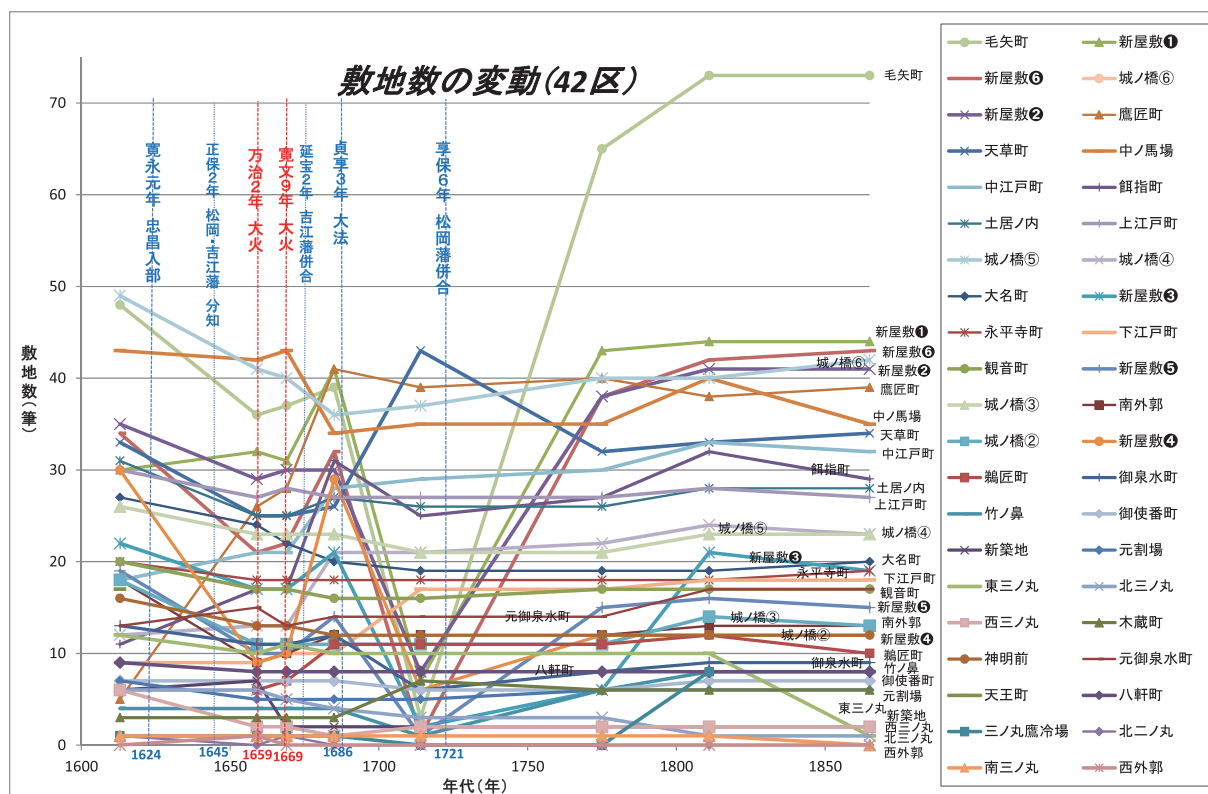


図1 42区にみる敷地数の変動

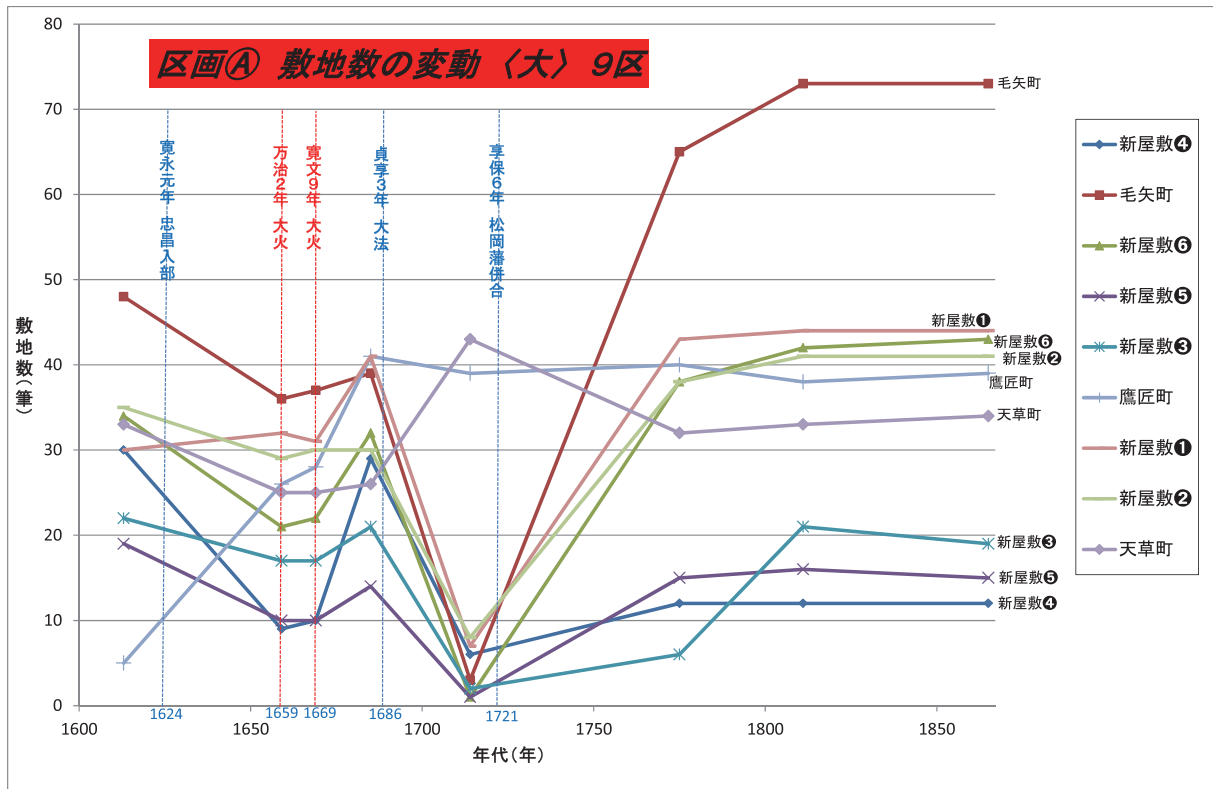


図2 敷地数の変動が大きい区画④ (9区)

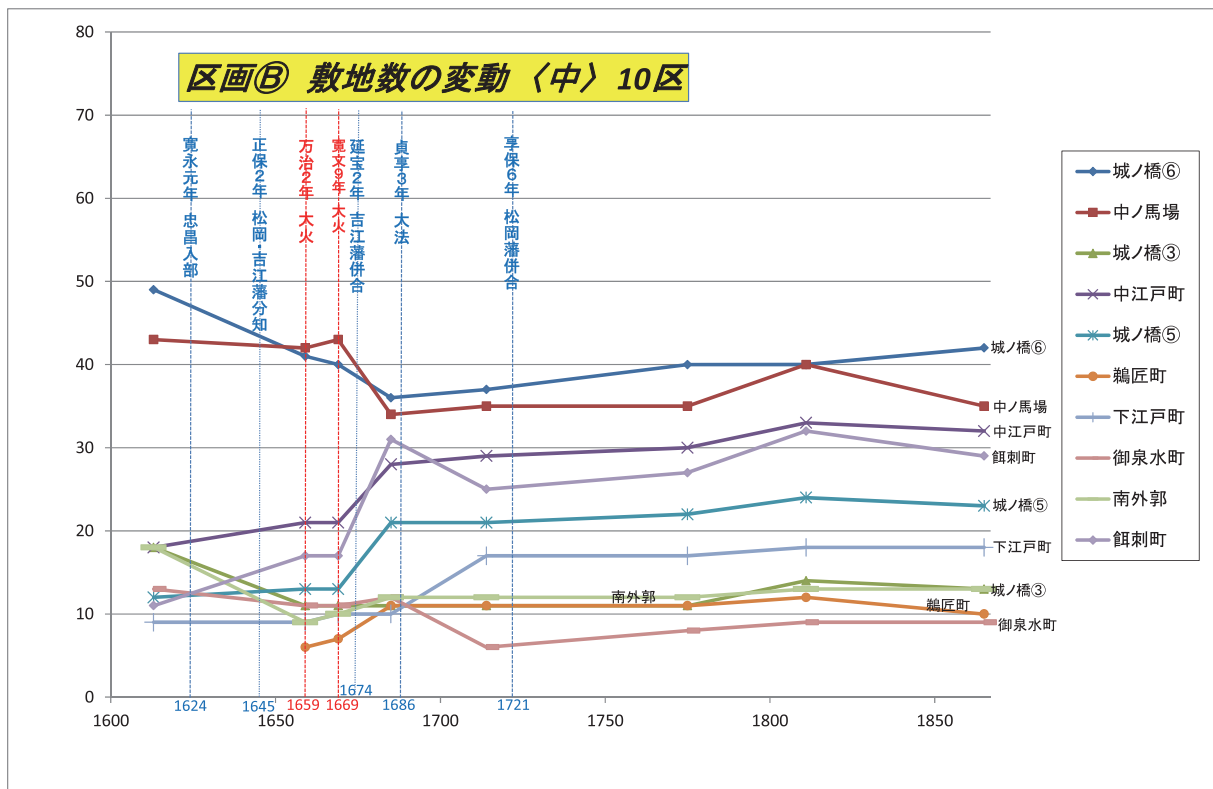


図3 敷地数の変動が中間にあたる区画⑤ (10区)

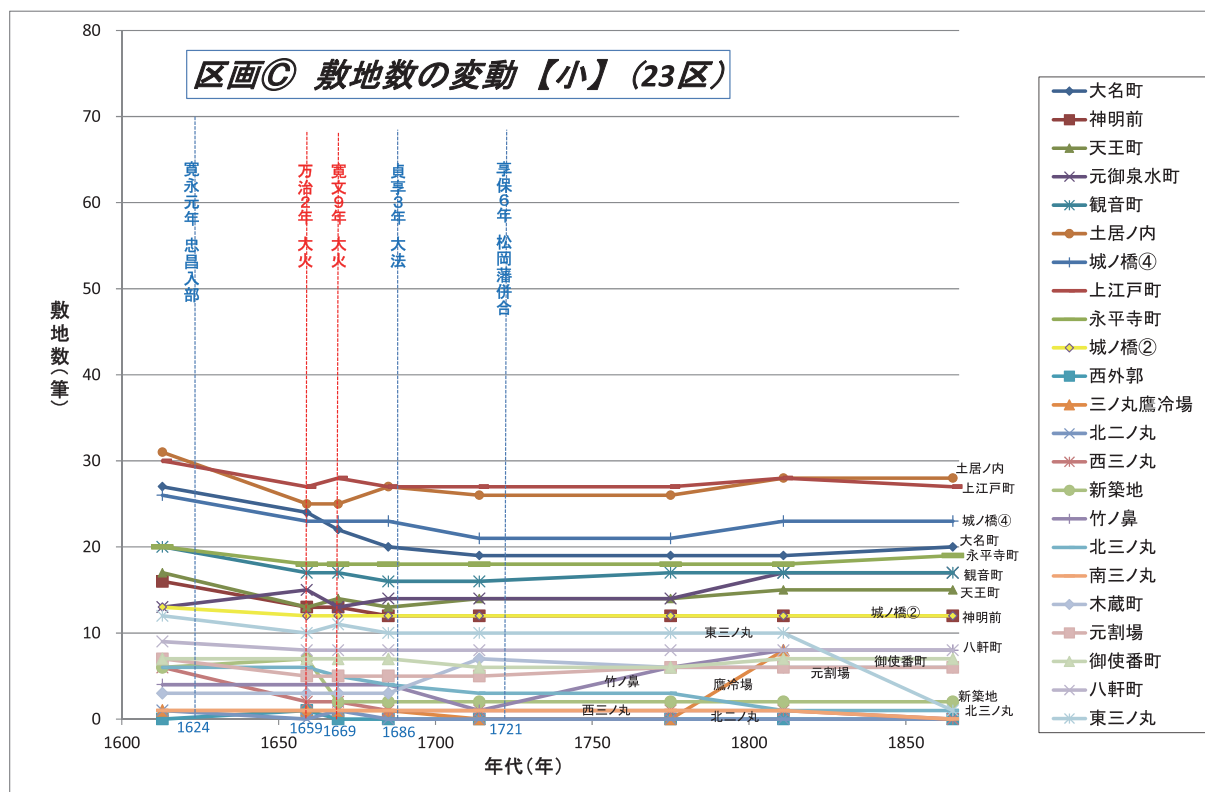


図4 敷地数の変動が小さい区画C (23区)

### 2.2.1 区画A

図2は42区の中で、敷地数の変動が大きい区画Aの9区における変動を示したものである。

9区中、最も変動が大きいのは毛矢町である。毛矢町の敷地数は、貞享2年に39筆あった敷地が、正徳4年は3筆に激減し、正徳4年から安永4年にかけて65筆に急増している。そして、敷地数は文化8年以降73筆あり、他の町や区域と比べて圧倒的に多い。

毛矢町と変動の傾向が似通っているのは、新屋敷①区～⑥区である。例えば、新屋敷①区は、貞享2年の敷地数は41筆あったが、正徳4年では7筆まで減り、安永4年は再び43筆まで戻っている。さらに文化8年以降の敷地数は44筆で、筆数は毛矢町ほど多くないが、幕末にかけて敷地数が増加する傾向は同じである。

既報のように、毛矢町と新屋敷の武家地は貞享3年の大法直後に一旦は空き地や地方地に替わったが、享保6年以降の松岡藩士の移住によって再び武家地に戻っている<sup>(15)</sup>。これが貞享2年から安永4年にかけての敷地数の増減に関連している。

一方、天草町と鷹匠町、中ノ馬場の3区の傾向は、毛矢町や新屋敷とは違っている。天草町の敷地数は、慶長18年に33筆あったが、貞享2年までに26筆に減少している。ところが、天草町の敷地数は正徳4年までに17筆に増加している。さらに敷地数が最も多い時期も正徳4年時である。これについては天草町が慶長以来、上級武士に仕える与力や足軽の屋敷が多く配されていた区画であり、貞享の大法後は大きい敷地を有していた与力や足軽屋敷がすべて分筆されて武家屋敷になっている。すなわち、上級武士の減俸の影響が、天草町の敷地数の増加に繋がっている。

鷹匠町の敷地数は、慶長18年は5筆に過ぎないが、万治2年以降、貞享2年にかけて徐々に増加し、貞享2年には41筆になっている。鷹匠町は武家町として成立した時期が遅く、慶長18年～万治2年の間に屋敷割された後に、鷹匠方の居住区になっている。また、貞享2年以降の城下図においては、これまで使われていた「御鷹匠三人」や「鷹師三人」などの表記は無くなり、個人名が示されている。これに伴い、寛文9年から貞享2年にかけては分筆が多く、それが鷹匠町の敷地数の増加になっている。



### 2.2.2 区画⑥

図3は、区画⑥に含まれる10区の敷地数の変動を示したものである。

図3をみると、城ノ橋⑥区や中ノ馬場などの7区は、貞享2年～正徳4年の間に敷地数が減少してない区が多く、貞享3年の大法の影響をほとんど受けなかったと考えられる。

これら7区の変動が大きい時期をみると、南外郭と城ノ橋⑥区、城ノ橋③区の3区は、慶長18年～寛文9年の大火前の間であり、中ノ馬場や鶴匠町、城ノ橋⑤区、中江戸町の4区は、寛文9年の大火後～貞享2年の間が最大である。この時期は、前者が寛永元年以降の藩主交代や分知に伴う藩士の移変と重なり、後者は寛文9年の大火後に武家地が移転することや敷地の合筆や分筆に関係している。

なかでも、変動が大きい中ノ馬場においては武家屋敷の一部が、寛文9年の大火後に城ノ橋に移り、その跡地は菜園になっている。

また、南外郭は慶長以来、大名町に次ぐ上級武家地であり、数筆の敷地が合筆して寛永元年に忠昌とともに越後高田から福井へ移った重臣の屋敷になっている。

これに対して、餌刺町の敷地数は、寛文9年の大火前の17筆が貞享2年までに31筆に増加している。餌刺町も鷹匠町同様、これまでの城下図でみられた「与力三人」や「足軽五人」などの表記でなくなったことが、敷地数が増加した理由である。その後、敷地数は正徳4年にかけて25筆に減っている。これは貞享の大法によるもので、与力屋敷の多くが地方地に替わっている。

御泉水町の敷地数は、慶長18年～貞享2年まではほとんど変化していないが、貞享2年以降は敷地数の変動が大きくなる。この変動は宝永5年(1708)以降、藩主別邸の御泉水の造営や改修の影響を受けたもので<sup>(16)</sup>、他の9区の変動との違いが窺える。

### 2.2.3 区画⑦

図4は、敷地数の変動が小さい区画⑦の23区における変動を示したものである。図4をみると、23区の変動はいずれの区も慶長18年から幕末の慶応までほぼ直線を示している。すなわち、江戸時代を通して敷地数の変動が小さかったことが明らかである。変動の状態から23区は、江戸時代を通して敷地数が10筆を超える10区と10筆以下の12区に大別できる。

10筆を超える11区は、土居ノ内、上江戸町、城ノ橋④区、大名町、永平寺町、観音町、天王町、城ノ橋②区、神明前、元御泉水町、東三ノ丸である。これらの区の多くは、慶長18年の敷地数が最も多く、貞享2年にかけて徐々に減少している。但し、貞享2年～正徳4年の間に敷地数が激減する区は一切ないことから、11区については貞享の大法の影響はほとんど受けていないことがわかる。

なお、東三ノ丸は先の10区と違い、慶長18年から文化8年まで敷地数はほぼ10筆前後で推移していたが、慶応には一挙に1筆に激減している。これは元治元年(1864)に東三ノ丸御屋形が新設されたことによる<sup>(17)</sup>。

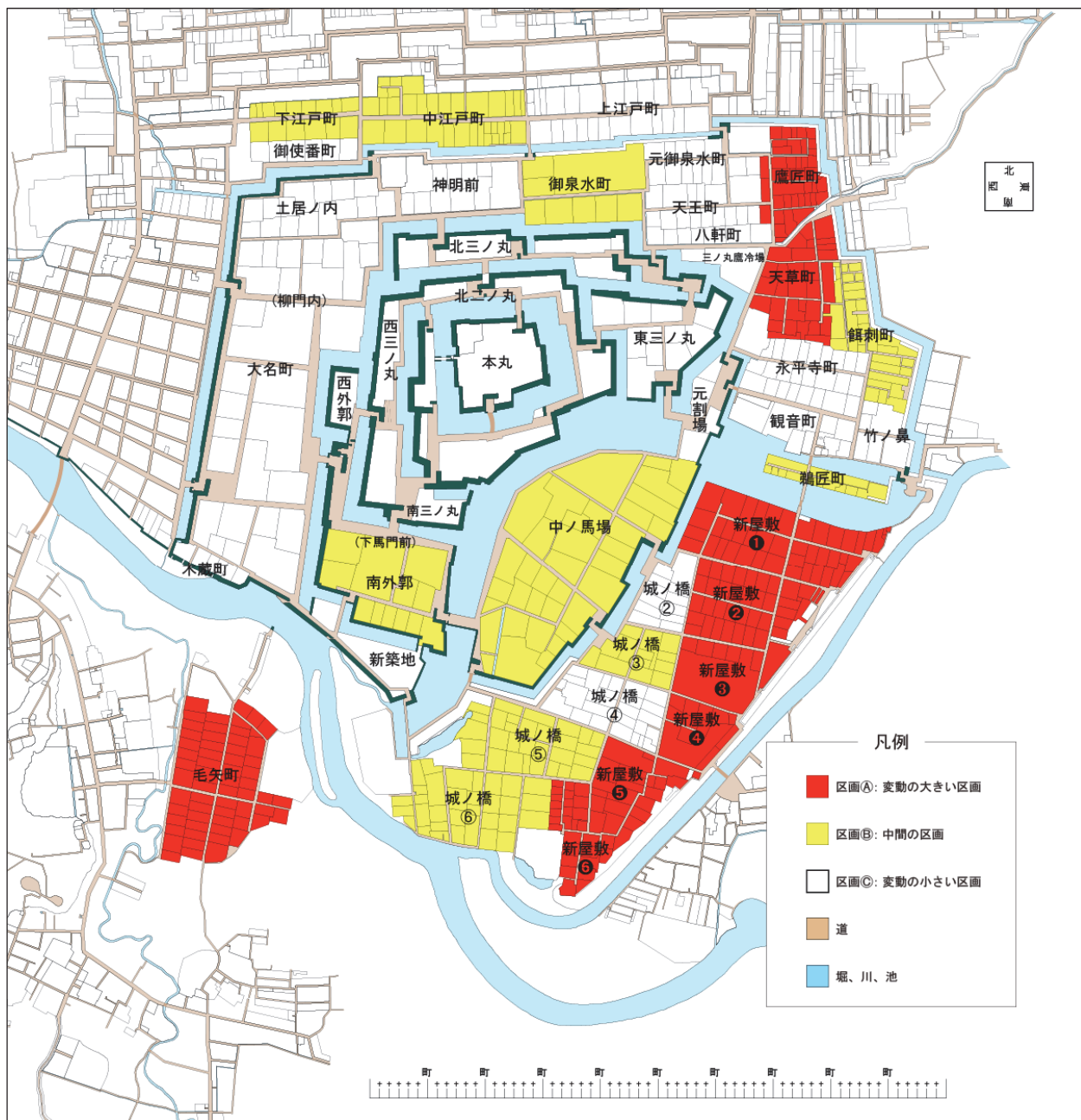
一方、10筆以下の12区は、西外郭、三ノ丸鷹冷場、北二ノ丸、西三ノ丸、新築地、竹ノ鼻、北三ノ丸、南三ノ丸、木蔵町、元割場、御使番町、八軒町である。

そのうち、西外郭、北二ノ丸、西三ノ丸、北三ノ丸、南三ノ丸の5区は城地であり、いずれの町も慶長期には重臣の屋敷が多く配されていた。しかし、時代とともに徐々に御座所や藩役所など藩の施設地に変化し、幕末まで武家地として存続するのは、南三ノ丸と北二ノ丸だけである。

これら12区においては、江戸時代を通して敷地数の変動はほとんどみられない。但し、竹ノ鼻と三ノ丸鷹冷場は正徳4年以降にやや変動がみられ、特に三ノ丸鷹冷場の敷地数は、安永4年～文化8年の間に0筆から8筆に増加している。この変動は、貞享の大法後に三ノ丸鷹冷場一帯は松林になっていたが、文化8年までに再び屋敷割されて武家地に戻されたことによるものである。

## 3. 城下における区画①、②、③の分布

以上、述べてきた変動の大きさごとに分けた3つ(区画①、区画②、区画③)の区画を、それぞれ城下図に色分けし、城下図に示したものが図5である<sup>(18)</sup>。



区画A：敷地数の変動が大きい区画 9 区 (毛矢町, 新屋敷①区～⑥区, 鷹匠町, 天草町)

区画B：区画Aと区画Cの中間的な変動を示す区画 10 区 (城ノ橋⑥区, 城ノ橋⑤区, 城ノ橋③区, 中ノ馬場, 鶴匠町, 南外郭, 御泉水町, 下江戸町, 鶴匠町, 中江戸町)

区画C：敷地数の変動が小さい区画 23 区 (大名町, 神明前, 天王町, 元御泉水町, 観音町, 土居ノ内, 城ノ橋④区, 上江戸町, 城ノ橋②区, 永平寺町, 東三ノ丸, 西外郭, 三ノ丸鷹冷場, 北二ノ丸, 西三ノ丸, 新築地, 竹ノ鼻, 北三ノ丸, 南三ノ丸, 木蔵町, 元割場, 御使番町, 八軒町)

図5 敷地数の変動が大きい区画A, 中間的な変動を示す区画B, 小さい区画Cの分布

(『松平文庫』, 松平宗紀所蔵, 福井県立図書館保管の  
享和3年の『福井分間之図』を基に作図した)

### 3.1. 区画㊤の分布

図5の赤色で示した区画㊤の9区は、すべて城下周辺部に位置し、毛矢町以外は城下の東側や東南側に集中している。既報のように<sup>(19)</sup>、福井城下の周辺部は中級武士と下級武士が混在する居住区であり、特に東南端の新屋敷および東端の天草町は慶長以来、上級武士に仕える与力や足輕の屋敷が多く配されている。また、同じ東端の鷹匠町は、江戸初期から幕末まで変わることなく、鷹匠方の居住区である。

このように、変動が大きい9区の分布状況は、城下周辺部、特に東側に集中していること、9区のほとんどが中級武士と下級武士が混在する居住区で与力屋敷や足輕屋敷が多かったことが指摘できる。

### 3.2. 区画㊦の分布

黄色で示した区画㊦の10区は、城下に点在している。このうち城下中心部の南外郭や中ノ馬場は、大名町に次ぐ上級武家地である。また、中江戸町と下江戸町は武家地の北寄りに位置し、なかでも中江戸町は、慶長16年(1611)に2代忠直の正室勝姫に従って福井へ移住した家臣のためにつくられた町である<sup>(20)</sup>。

一方、餌刺町と鵜匠町は城下の東端にある。両町とも下級武士の居住区にあたり、餌刺町は鷹の餌やりに関係する役方が住む町で、鵜匠町は鵜匠方の屋敷町である。また、東南部の城ノ橋③区・⑤区・⑥区についても、下級武士の居住区である。したがって、区画㊦の分布は一部、城下中心部の上級武家町である南外郭と中ノ馬場が含まれているが、それ以外の8区は北寄りの中級武家町、あるいは東南部から東端にかけての与力町や足輕町が主であったことが指摘できる。

### 3.3. 区画㊧の分布

白色で示した区画㊧の23区は、本丸を囲む城地の一部と本丸の西側から北側にかけて分布し、区画㊤と区画㊦と比べても本丸に近い範囲にあることが確認できる。

23区の中には最上級武家町である大名町のほか、慶長期に重臣屋敷が集中していた北二ノ丸や南三ノ丸などの城地も含まれている。なかでも城地は、慶長18年には14筆あった武家地は時代とともに減少して、幕末に至っては御座所や藩役所に替わっている。

区画㊧に含まれる町のほとんどが、本丸の西側から北側にかけて配されていた上級武家町と中級武家町であり、これらの町の共通点は武家町として成立した時期は古く、いずれも江戸時代を通して常に武家町であったことである。また、新屋敷と城ノ橋、天草町と永平寺町のように、隣接する町であっても敷地数の変動が大きい区画と小さい区画に分かれていることも今回明らかにできた。

## 4. おわりに

以上、江戸時代における武家地の敷地数の変動について検討した結果、以下のことが指摘できる。

- 1) 福井城下の武家地における敷地数の変動は、藩の動向によって大きく左右される。
- 2) 武家地を42区に分け、敷地数の変動が大きい9区を区画㊤、変動が小さい23区を区画㊧、区画㊤と区画㊧の中間的な変動を示す10区を区画㊦に区分した。
- 3) 変動が大きい区画㊤は、毛矢町以外の8区が城下周辺部の東側から東南側にかけて集中している。
- 4) 区画㊤に含まれる9区はすべて中級と下級武士の居住区であり、特に毛矢町と新屋敷の変動は大きく、貞享3年の大法直後と享保6年以降の変動が著しい。
- 5) 区画㊦の10区の分布は城下に点在し、一部を除いて北寄りの中級武家町と東南部から東端にかけての下級武士の屋敷町が主である。
- 6) 区画㊧の23区は、本丸を囲む城地の一部と本丸の西側から北側にかけて分布し、区画㊤と区画㊦と比べても本丸に近い範囲に位置している。
- 7) 区画㊦の御泉水町と区画㊧の東三ノ丸でみられる一時的な変動は、御泉水町は御泉水邸の拡張や縮小によるもので、東三ノ丸は御屋形の新設に関連する。
- 8) 新屋敷と城ノ橋、天草町と永平寺町のように、敷地数の変動が大きい区画と小さい区画が隣接している。



## 注

- (1) 8枚の城下絵図はすべて、松平文庫、松平宗紀所蔵、福井県立図書館保管。
- (2) 伊豆蔵庫喜、吉田純一、“福井城下の武家地の研究 8～28”，日本建築学会大会梗概集 F-2，(2010-2014)，同北陸支部研究報告集，Vol.50-56，(2007-2014)，福井工業大学研究紀要，Vol.37-44，(2007-2014)，参照。
- (3) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“国事叢記 上”，(1961)，p167，万治2年4月2日条，およびpp187-188，寛文9年4月15日条，福井県郷土誌懇談会。また，“福井市史 資料編別巻 絵図・地図”，(1988)，p45，福井市，によると，万治2年(1659)の大火後，片町(町人地)の北方にあった西別院や東別院をはじめとする寺院が集まった寺町を城下周辺部に移転させている。また，寛文9年(1669)の大火後には，城下東南部の城ノ橋寺町や勝見寺町を東端の外中島町に移し，その寺町跡に中ノ馬場の百間掘沿いにあった武家屋敷を移転させている。さらに中ノ馬場には，城を火災から護るための火除け地として菜園を設けている。
- (4) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“国事叢記 上”，(1961)，p270，貞享3年3月3日条，によると，貞享3年(1686)に福井藩は25万石に半知されている。その際，1000人余の藩士が禄を失い，福井城下の武家屋敷地の多くは空き地となっている。
- (5) 福井県立図書館、福井県郷土誌懇談会共編，“片簞記・続片簞記”，(1955)，p658，享保6年12月11日条，福井県立図書館，によると，享保6年(1721)12月に，松岡藩主昌平が宗昌と改名して福井藩を相続し9代藩主となった。その結果，福井藩は松岡藩5万石を併合して30万石となり，松岡藩士も昌平とともに福井城下へ移り住んでいる。
- (6) 前掲4，pp107-108，寛永元年3月15日条。
- (7) 注5と同じ。
- (8) 江戸時代の区割は，通りに面する両側を基準に区割されるのが通例であるが，今回は便宜上，現代の区割の方法(通りと通りの間の区画)で整理した。
- (9) 本研究においての城ノ橋と新屋敷の区分は，貞享3年の大火後に地方地や空き地にならなかった城ノ橋地区の中央から西側にかけての武家地を城ノ橋とし，享保6年以降の松岡藩士の移住によって再興された東側および東南部の武家地を新屋敷とした。そのため，城ノ橋①は，新屋敷①に含まれている。なお，城ノ橋地区の区割りについては，伊豆蔵庫喜，吉田純一“城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 1”日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.56，pp446-449，(2013)，“城ノ橋地区における武家屋敷地の変遷 2・3”福井工業大学研究紀要，Vol.43，pp387-398，(2013)，Vol.44，pp286-296，(2014)，で詳しく報告している。
- (10) 前掲4，p108，寛永元年3月15日条。
- (11) 前掲4，p141，正保2年11月19日条。
- (12) 前掲4，p223，延宝2年5月6日条，に「越前守君御遺領に吉江を加て，昌親君江被進旨。御領四十七万五千五百七石六斗八合。」とある。
- (13) 本報で述べる南外郭は，下馬門前と漆門内の武家地を指す。
- (14) 本報の土居ノ内は，柳門前の武家地も含めた。
- (15) 伊豆蔵庫喜，吉田純一“毛矢町における武家屋敷地の変遷”，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.57，(2014)，伊豆蔵庫喜，吉田純一“城ノ橋地区の武家屋敷地の変遷 その3”，福井工業大学研究紀要，Vol.44，(2014)参照。
- (16) 三上一夫“越藩史略”，(1975)，p298，p428，歴史図書社，によると，藩主の別邸である御泉水は造営以降，宝永5年(1708)の昌明(後，7代吉品)により一旦は拡張するが，享保11年(1726)には敷地が縮小されている。
- (17) “福井市史 資料編別巻 絵図・地図”，(1988)，p89，福井市，によると，文久2年(1862)の大名妻子の国元居住が可能になり，16代慶永は翌年の文久3年(1863)に正室勇姫を福井へ移住させており，これに伴って造営されたのが三ノ丸屋形である。
- (18) 注1と同じ，松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管。  
図5は，江戸時代を通して最も敷地数が多い時期および屋敷割の状態が鮮明で，かつ町名や屋敷地の居住者名が記載されている享和3年(1803)の『福井分間之図』をもとに作図したものを使用した。
- (19) 伊豆蔵庫喜，“武家屋敷の分布—福井城下の武家地の研究 その1—”，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.45，(2002)，参照。
- (20) 前掲4，p43，に「高田姫自江戸被召連候者罷在町，後，江戸町云。」とある。

(平成27年3月31日受理)